仮想

抽象的なお題をさてどう料理したか？
まずは本選10作品をどうぞ。
惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は
「補足資料」にてお楽しみください。

ゲームオーバーの重要性

あなたは　しにました

あなたはこの一文を見たことがあるだろうか。

この意味深な一文は往年の名作ＲＰＧ(ロールプレイングゲーム)「ドラゴンクエスト」のゲームオーバー時のものだ。

私が幼い頃にドラゴンクエストをプレイして、初めてこの画面に出会ったときは本当に泣きそうになった。プレイ中、赤の文字など全く出てこないのにいきなり赤く表示される。この台詞はあまりにも鮮烈で、死というものの特異性をまざまざと見せつけられた。幼いときの記憶のせいか、いつになってもあの画面は直視出来ない。

そう、初期のテレビゲームにはこのような過激な死を表す表現が含まれていたのだ。しかし、いつの間にかゲームオーバー時の死を直接連想させる表現が無くなってしまった。

私はこれと現実世界の自殺・殺人増加の一端を担っていると考えている。それは私が死というものを初めて首の薄皮一枚のところでゾクリと感じたのが、ＲＰＧだったからだ。私がそうだったのだから、テレビゲームが更に普及した昨今ではより多くの子供達がテレビゲームで初めて死を知るのではないだろうか。

昔の子供達はある程度の残虐性を含んだ童話で人の痛みや死の概念などを補完していたが、現在は子供達の童話離れ・テレビ依存と共に童話自体が残虐性の無いものへと改訂されてしまった。今や、童話は子供達に一方的なハッピーエンドしか教えない。これでは死を初めて感じるのがテレビゲームになってしまっても仕方が無い。

小説、ドラマ、映画など、身の回りには山のように仮想世界がある。今挙げたものは受動参加型の仮想世界である。これらに対して、ＲＰＧは特殊だ。何故なら、自らが仮想世界の住人を演じるＲＰＧは能動参加型仮想世界と言えるからだ。そして、ＲＰＧは自ら参加するだけに仮想世界への没入具合は他の追随を許さない。自らの死ですら仮想的に経験可能である。それを多感な子供達が経験すれば、明確な記憶としてインプットされるだろう。

もし、子供達が死を知ったときそれを教えるＲＰＧがもしも死を直接的に感じさせなければ、その子供達は死を軽視するようになってしまう。換言すれば死の垣根というものが著しく低くなってしまう。そして、死は伝播し、子供達を蝕んでいく。まさしく、仮想世界における死のゆとり教育が作り出した弊害である。誰もが思い浮かべるであろう死に際する痛みや悲しみがゲームの先入観によって麻痺してしまっているのだ。

テレビに出てくる「専門家」と呼ばれる人々はテレビゲームには「リセット」があるからテレビゲームは殺人や自殺を助長すると言うが、これは間違いだ。彼等はいつもリセット以降の論理展開をほとんどしない。それは、宗教的な輪廻転生もまた「リセット」の一種であり、論理展開すれば宗教を否定することになると同時に矛盾を招くのが明白であるからなのだ。

さぁメーカーよ、死を想起させる「ゲームオーバー」で子供達を死の連鎖から救い出せ！

今こそ、「ゲームオーバー」を重要視すべきときは来た！

『ふしぎな国のアリス』

私はアリス。ここはハートの女王様のお城。

私は今、裁判に参加している。ホントに、なんでこうなったんだろう。さっきから、おかしなことばかり起こっているの。たしか、急いでいるウサギさんを追いかけたのが始まりだったわね。その後は、なんだかヘンなことばかり。身長が半分になってしまったり、逆にとっても大きくなってしまったり。永遠に終わらないティーパーティーに参加もしたわ。「なんでもない日、おめでとう!」だなんて、ふざけているわ。誕生日とか、一年に一回しかないから楽しいんじゃない! それと、さっきからヘンなチェシャ猫が何度も出てきているんだけれど、正直、気味が悪いわ。あーあ、さっさと裁判なんて終わらないかしら。だって犯人はハートのジャック《The Knave (悪党) of Hearts》なのよ。誰がどう見たって有罪じゃない。え、はい、なんでしょうか、ハートの女王様。なに? え、私?

『チョコレート・アンダーグラウンド』

ぼくはハントリー。ここは地下のチョコバー。

ぼくは今、地下でチョコレートを密造している。それも〈健全健康党〉の奴らにばれないように、ひっそりと、だ。でも、ぼくはチョコレートを作りながらも、その甘い香りににつられて、ついつい味見をしてしまう。甘い。甘くて、すごくおいしい。ぼくはやっぱり、チョコレートがなければ生きていけない。あぁ、まだチョコレート禁止法のなかった世界が懐かしい。Tim Tam、Crunchie、Lila Pause、考えただけでよだれが出てくる。DAIRY MILK、TOBLERONE、Mars、Milky Way、Galaxy、口が味を覚えているようだ。Snickers、Twix、Time Out、mr. big、Kitkat、あぁ、もう既にこれらのチョコレートが過去の遺産になってしまったのか。いや、ちがう。そんなはずはない! ぼくは戦うぞ。世界にチョコレートが復活するその日まで! 堂々とチョコレートが食べられるようになるその日まで!

『モモ』

私はモモ。ここは円形劇場の跡地。

私は今、友人のジジとベッポといっしょにお話をしているの。ジジは、本当はジロラモという名前で、お話が上手、毎日違うお話を私たちのためにしてくれるのよ。ベッポは、町の掃除夫で、実はもうおじいさん。あんまり話すことはないけれども、やさしくて、思慮深いおじいさんよ。さっきまで私たちは、今、町の大人たちが、なんだかいつもよりいそがしそうにしていることについて、お話していたの。なんだか、みんな「時間がない」「時間がない」って、あっちに行くのも駆け足で、戻ってくるのも駆け足で、ほんとうに、とてもいそがしそう。

ジジとベッポは、あんなふうにはならないよね。

ねぇジジ、私もっとあなたのお話が聞きたいわ。今度はどんなお話を聞かせてくれるの?

『ラグウィード』

ぼくはラグウィード。ここはブルックの丘。

ぼくは今、父さんのヴァレリアンと、母さんのクローバーと、五十匹の兄弟たちに囲まれて、別れを惜しまれている。惜しまれている、っていうのは少しおかしく聞こえるかもしれない。けれど、実際そうなんだから仕方がないじゃないか。だって、ぼくは今から東に行くのだもの。ぼくはもう4ヶ月、立派なキンイロネズミのオスなんだ。えっと、たしかにブルックはすばらしい場所だ。食べ物も豊富で飢える事もない。でも、そう、ここはまだ世界の一部なんだ。まだ世界は他にもあるんだ。だからぼくは東に行くんだ。絶対に帰ってくると、母さんに約束して。ひとつ下の弟のライに冗談を飛ばし、さぁ出発の時間だ。一緒に歌おう、ネズミたちの合言葉。

「世界がネズミで満ちるように、Oh」

『世界がネズミで満ちるように、Oh』

それじゃあ、いってきます。

『　　』

私はワタシ。ここは本を閉じた後の、さめない夢。

私は今、病室の窓から外を眺めている。私にとって『外』は、ここから見える景色だけ。この部屋と、窓の外の、空と海と森と、それが私の世界のスベテ。私はただ、この甘い蜜の部屋から、この世界を硝子越しに観察するだけの、矮小な存在。私は(あぁ、ワタシ、だなんて、なんて傲慢な言葉)この現実を、否定する。こんな人生、ほんとじゃないんだ、って。私はまだ、赤い夢の中に戻れる、って。

だから、ワタシを守るために、私は本を読む。ふと手に取った次の本は、『Nothing But The Truth』「ただの真実」だなんて、今の私には、皮肉にもならない。でも本を読んでいる間は、私はこの世界を、忘れられる。穢れずに、羽ばたいていられる。

そっとこぼれてくる、涙の意味さえ、分からない。

あぁ、なんで、世界は文学で出来ていないんだろう。

頭を紡ぎ夢と遊べ

青白い蛍光灯が灯る長い長い廊下を一人で歩いている。ここは病院・・か？遥か彼方に黒い影が見える。影は、這うようにして私に向かって近づいてくる。お互いに近づきあっているので直にすれ違うだろう。しかし、ゆっくりした影に近づくと、良くないことが起こる。分かっている。体は明瞭に動かず、前進してしまう。そうか、これは夢だ！全力で目を開こうとすると、目の前が真っ白になった。

重いまぶたが開くのを感じ、目の前に私の寝室が広がった。自分のベッドに寝ている感触。隣には先月結婚したばかりの美しい妻。綺麗な髪を触ろうと手を伸ばすと、部屋の異変に気付いた。部屋の天井を突き抜けて深宇宙が見えるのだ！どうやらまだ私は夢の中のようだ。もう一度強く目を開けようとする。目の前が真っ暗になった。

重いまぶたが開くのを感じる。まだ夢の中にいることを気付くのに、多い時間はかからなかった。なんてことだ。あの廊下にまた戻ってしまった。勇気を出して廊下の向こうを見てみると、影はもうすぐそこまで来ている。目を閉じることが出来ない。影から二本の腕のようなものが伸び、私の首に絡む。少しずつ絞まっていくのを感じるが、体の動きを制御できない、逃れられない！なぜだ・・、影から目が放せない。影の顔が・・、見え・・、ま、まさか・・・・・・！

冷水を浴びせられたように汗をかいた自分の体が気持ち悪い。そこには波打つ自分の体、どこか青ざめた妻の顔があった。

「今は落ち着いているけど、本当に大丈夫？すごくうなされていたわよ。」

余韻の残る首を鏡で見てみると首にははっきりとあざがついている。鏡に映る妻の横顔を見ながら私は考えた。私は妻に救われたのか、それとも・・。ニタリ。最後に笑ったあの影の顔が、どうしても思い出せなかった。

「……え？……」

気が付いて目の前の事態を把握したときには、もう全てが終わってしまっていた。

赤い液体で真っ赤に染まった両手。そしてその手が持っているものは……

急に手が小刻みに震えだし、持っていたエモノを取り落としてしまう。

金属音が、薄暗い闇に包まれた部屋の中に一際高く響き渡った。

仮想と現実

居間の方に目を向けてみる。

何度見たって変わらない。彼はうつ伏せに横たわったまま、身じろぎ一つしない。

彼がついさっきまで見ていたテレビのバラエティー番組から、耳障りな笑い声が聞こえる。芸人達が馬鹿みたいにイブ、イブと連呼している。

そうだ、今日はクリスマスイブだった。

楽しみにしていたクリスマスイブ。彼と一緒に町を歩いて、腕によりをかけて作ったディナーとケーキを彼と食べて、彼とプレゼントを交換し合って、それから、それから……。

そこまで考えてから、目の前の現実に目を移す。

そこにあるのは残酷な現実。自分の理想とはあまりにもかけ離れた、まるでスプラッター映画の一シーンのような光景。

何だかむしゃくしゃして、自分の髪を掻き毟る。

髪型が乱れ、手の赤いのが髪にも付いてしまったけれど、今さらもうどうだっていい。

ああ、そういえばこの髪型は彼のお気に入りだったっけ。私の趣味じゃなかったんだけどなあ。

今思えば、私と彼の関係にはいつも嘘が付き纏っていたんじゃないだろうか。

嘘の趣味。嘘の特技。嘘の感情。それは誰もがついてしまう、一つ一つはとても些細な嘘。

でも、それらの嘘を積み重ねて彼と関係を保ってきた結果がコレならば、私は嘘をつき続けた結果、自分の理想までをも仮想(うそ)にしてしまったということなのだろう。

「あははっ」

可笑しい

「あはははははは」

何だか可笑しくって、面白くって、笑いが止まらない

「あはははははははははははははははははははははははははははははははは」

部屋の中を、私とテレビの笑い声の奇怪な二重奏がこだまする。

でもまだ大丈夫。だって私は自分の間違いに気付くことができたんだもの。あそこの「アレ」さえ片付ければまだ十分挽回できる。「アレ」さえうまく処分できれば、全部なかったことにして元の生活に戻れる。

そうに違いない。違いない違いない違いない違いない。

一度大きく深呼吸して、改めて「アレ」に目を向ける。

どうしよう、これ。

埋めてしまおうか？　駄目だ、そんなのは直ぐにばれてしまう。

燃やすのはどうだろう？　それも却下、高温で燃やす手段がない。

埋めるのも燃やすのもダメ、それじゃあ

「喰べてしまおうか？」

今の私には、それが最善の方法に思えた。

既に固くなり始めている「ソレ」の一部をナイフで切り取り、口へ運んでみる。

「…！うげぇ、げほっ、げほっ」

――不味いなんてもんじゃない

味覚よりも生理的な嫌悪感が先に立つ感触。とても喰べられる代物じゃない。

万策尽き途方にくれる私の耳に、その時さらに止めを刺すように背後からの絶叫が聞こえた。

「うわっ、どうしたんだ一体！？」

――見つかってしまった。

振り返ると案の定、さっきまで居間で居眠りしていた彼が、驚きの表情でこちらを見つめていた。

彼が驚くのも無理はない、調理台の上には失敗した料理の数々が山と積まれ、あたり一面には同じく失敗したケーキの破片がこびり付いている。さらに極め付きに私は全身イチゴシロップまみれときて、キッチンは今やスプラッター映画さながらの状況を呈しているのだから。

もう逃げ場はない。涙を必死に堪えながら、私は全てを告白した。

「嘘ついてごめんなさい、私実は料理なんて全然したことがなかったの」

料理は得意中の得意だと言い続けていた今までの嘘が暴かれて、彼はいったいどんな反応をするだろう。

彼は最初キョトンとしていたが、急に床に落ちていたスプーンを拾って先程私が食べた料理を食べ始め、笑顔で言った。

「うん、すごくおいしいよ」　それは本当に罪がない、思いやりの嘘。

私は、もう涙を堪えることができなかった。

今日はクリスマスイブ、万人に幸せが訪れる日

「ふぁああ…ああ、ようやく目が覚めたよ。今日はいい天気だ。絶好の殺人日和だ。今日こそ親父を殺すしかない。いつも飲んだくれで俺を殴っているばかりいる親父。いつもあいつは朝帰り。俺を学校にも行かせないし、しかも俺を汚いものをみるようにして扱いやがる。家事はすべてあいつじゃなくておれがやっている。なのにあいつは俺を殴ってばかり。おふくろは三年前に突然いなくなった。噂じゃどこかの男と駆け落ちしたらしい。ほんとうに許せないね、両親ともども。だから俺はとりあえず親父から片付けることにしたのだよ。こんな地獄の毎日とはこれでおさらばだ。あいつが帰ってきて玄関の扉を開けたら、イチ・ニのサンで包丁だ。おっ、いよいよ外の方で足音が聞こえてきた…」

「ムニャムニャ…おはよう？おかあさんはまだかえってきていないの？ぼく、きようもおねしょしちゃったみたい。すぐふとんをほしてくれるひとがいなくて、すごくこまる。でもぼくがなにもしなくても、いつもふとんはいつのまにかほされているし、ごはんもできているから、きっと、おかあさんはまいにちここにきているんだとおもう。そういえば、おとうさんがもうかえってきているんだろうな。おとうさんはいつも、ぼくをつねったりたたいたりばかりするからこわくてきらいだ。ぜんぜんぼくのせわなんかしてくれない。…ん？そういえば、ぼくのて、まっかだな？まえにたおれているひとがいるけど…これ、おとうさん…？」

「今、私はここに起床した。気づいたら拘置所の中で寝ていた。何をしたか全く記憶に無いが、恐らく私の残り二つの人格が、何か犯罪を起こしてしまったようだ。正直に話そう。私は三重人格である。一人目は十三歳、二人目は五歳、そして三人目の私は実際の体の年齢と一致する二十歳である。この事実を把握しているのは、基本人格である私のみである。私は幼いときから父親から暴力を受けてきた。それが原因でこのような病に冒されたのである。私の意志とは関係なく、私の人格は転換してしまう。記憶も、飛び飛びのものしか存在しない。さて、現在私は精神学を独学で学んでいる。これまでわかったことを述べると、一般人にも**『本当の自分は誰なのか？』『ここにいる自分はあくまで仮想的なものに過ぎないのではないか』**とまるで私のように悩むケースが非常に多い。つまり他人に対する仮面を付け外しする結果、自分独自の考え方、行動パターンを見失ってしまうのだ。果たして、『真の自分』などという概念は存在しないのだろうか…この問題は非常にややこしくて…だめだ、また私は眠くなってきてしまった……」

「まさき、好きだよ。」
「俺もだよ、優香」
海に臨む夜の公園で一組の男女が抱き合っている。まさき、と呼ばれた男は、心地よい潮風の中にも彼女の髪のにおいを感じていた。
「私、そろそろいかなくちゃ。離れるのは寂しいけど。」
「ああ、でも、またすぐ会えるさ。」
「少しの間でも寂しいよぅ・・・」
「そうだよな・・・。なぁ、俺たちもう現実(リアル)で会ってもいいんじゃないかな。お互いこんなに想っているんだし。俺は優香の心が好きになったんだ。優香が誰であろうと絶対受け入れるよ。」
「・・・わかった。あたしも絶対受け入れる。」
「・・・じゃあ明日は本物(リアル)の臨海公園で。」
「うん。」
二人はロづけをかわし、反対方向へと別れていった。
「今度会うときは『はじめまして』だね」
「ふふったしかにな。じゃあまた明日。」
「うん、またね」

NICE TO MEET YOU

~When you accept me~

神経接続(コネクション)を切断し、ヘッドギアをはずす。体の感覚が戻ったときのしびれには何度体験してもなれることができない。やべっよだれ垂れてた。
「たくや、ご飯よ!降りてきなさい。」
タイミングよく姉さんの声が聞こえる。
「は~い、いまいきまーす。」
うちは再婚した両親が不運にも去年交通事故で死んでしまい、今は義父の連れ子の姉との二人暮らし。その反動か、俺は仮想(バーチャル)の世界にのめり込んでいた。そんな中出会ったのが優香だ。
「あとで買い物いくんだけど、明日の夕飯なにがいい?」
「俺、明日の夜いないから夕飯いいよ。」
「え、どうしたの?まさか、彼女とデートとか(にやり)?」
「そ、そんなんじゃねぇよ。」
「はは、そりゃそうだ。仮想中毒者(バーチャルジャンキー)のあんたが彼女なんてできるわけないもんね。わかった。どうせあたしも出かけるし。」
「失礼だな。作る気無いだけだよ。」
なんか気恥ずかしいのでつい嘘をついてしまった。姉のあかねは最近、母の代わりに家事もこなすし、しっかりしてきたようだ。もうちょっと女っ気を出せばモテると思うんだけどなぁ。いやぁしかし俺もがんばったね。恋愛経験の乏しい俺だけど、仮想(バーチャル)だとなぜか強気になれるし、クサいことも言えてしまう。姉と違って優香は甘えん坊でかわいいのだ。「まさき」は2、3歳くらいサバ読んでいたから、優香は俺が高校生って知ったらびっくりするかな。まあ、年下の彼ってことで問題ないよね。
夕飯を食う気がしなかったのは、いつもどおり有り合わせの適当な料理だったからもあるが、優香の甘いくちびるの味がまだ残っている気がしたからだ。本当の優香のキスはどんな味がするんだろうか。
翌日の夕方、たくやは現実(リアル)の臨海公園に立っていた。
仮想(バーチャル)は限りなく現実(リアル)に近いが、今感じている動悸や緊張はいつもより全然本物(リアル)だった。
「まさ・・・き?」
きた!
「優香?」
そう言って振り返ると、そこにいたのは・・・なんだよ、ねえちゃんかよ。なんでこんなところに・・・ってもしかして『まさき?』って言った?
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・受け入れ・・・る?」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・ハジメマシテ」

ライバルは親友

僕の親友に、石田という男がいる。小学校入学の頃からずっと友達で、部活は別々だったけど、友情の絆は今まで変わらなかった。

石田は完璧な男だ。顔は格好いいし勉強もできる。それでいてスポーツ万能で、部活ではサッカー部のキャプテンを務めたこともある。おまけに性格もよくて、何をやっても中途半端な僕をいつもサポートしてくれる。いつしか石田は親友であるとともに、憧れの存在になっていった。少しでも、彼に近づきたかった。

だから僕は、何か困難な局面に当たったとき、いつも石田のことを想像した。「あいつなら、どんな風に振舞うだろう」なんて考えた。テストの難問、部活の大事な試合。遅刻しそうなときとか、大好きな女の子を振り向かせたいときも。それで成功したこともあったし、失敗したこともあったけど、おかげで高校は石田と同じ学校に行くことができたし、段々勉強もできるようになっていった。

高二も終わりに近づいてきた頃、僕は志望大学を決めた。小学生のときからの夢に近づくため、先生や家族とも相談して決めた結果だった。それが、偶然石田と同じ大学、同じ学部になってしまった。

「これからはライバルだな」と、石田に言われた。親友であり憧れでもあった石田に「ライバルだ」と言われて、嬉しくもあったが少し寂しかった。

だから受験勉強に入った当初は、何も考えずに必死に勉強していた。それでも、あの時のことばが引っかかって、一時期勉強がはかどらなくなってしまった。そんな時、気がついたら、やっぱり「あいつなら、どんな風に振舞うだろう」って考えていた。そしたら、ひとつの答えに辿り着いた。

ライバルって言ったって、ただ競い合うだけじゃない。時には競い合い、時には助け合ってお互いを高めあっていく。それが本当の意味での「ライバル」だって。そう言いたいんだろ、石田……。そう考えたら、心のなかの寂しさは、自然と消えていった。石田の思いに応えるためにも、勉強に一層、熱が入った。

そして今。僕は石田と同じ大学で勉強している。石田は合格発表の場で、こんなことを言ってくれた。

「あのときの言葉の意味、お前ならわかってくれたよな?」

僕はもちろん、と大きく笑った。

多くは語らなくても、意思は通じ合う。やっぱり僕たちは親友だ。

電脳遊戯

『今日はどこのダンジョンに行く？』
『何言ってんだよｗ　どうせ初心者用のところにしか行かないんだろｗｗｗ』

パソコンの画面上に表示された文字列を見て、くすりと笑みが漏れる。そうだよ、もちろんさ。心の中で笑みを溢しつつ、僕はキーボードを叩いた。

今僕の目の前では、とあるネットゲームが起動している。自分の分身となるキャラクターを作り、仮想世界を冒険する。街で買い物をしたり、他のプレイヤーとパーティーを組んだり、ダンジョンでモンスターを倒したり、と、大雑把に言えばそんな感じのゲームだ。

僕がこのゲームを始めてすでに2年。レベルも当然高い。だから初心者用のダンジョンに行く必要はない。普通だったら。

「痛っ」

不意に、右腕に響くような痛みが走る。くそ、思い出しちゃったじゃないか。

右腕に巻かれた包帯の下には酷い打撲を負っている。同じクラスのあの馬鹿どもにやられたせいだ。僕は何もしてないのに、あいつらよってたかって殴りやがって。クラスのほかの連中も見てみぬふりをするし。

ああ、ムカムカしてきた。早く憂さ晴らししないと。

そう思い、僕は仲間と一緒に初心者用のダンジョンに向かった。

『あいつらなんかちょうどよくね？』
『ちょｗ　まじかｗ』
『レベル3って、おまえマジ外道ｗｗｗ』

僕がこのゲームに傾倒しているのには理由がある。それは、ほかのプレイヤーに対して攻撃をすることができる、ということだ。プレイヤーキラー、いわゆるPKというものが、僕がこのゲームで主にやっていることだ。元来馴れ合いをするための場であるネットゲームにおいて、PKはかなり嫌われているが、僕らはそんなことは一向に気にしない。やりたいことをやってこそゲームだろう。

今日も、さっき目星をつけたパーティーに襲い掛かる。対応の遅さや先頭の不慣れさからして、初心者丸出しだ。こんなやつらにてこずるはずもない。ものの3分足らずで死亡させる。この、圧倒的な強者が弱いものを蹂躙する爽快感がたまらない。世界の覇者になったような高揚感が脳裏を駆け巡る。至福の瞬間。

1時間ほどPKを満喫した僕らは、街のあるマップに引き上げて何をするでもなく駄弁っていた。現実世界では話す友達もいない僕だけど、今一緒にパーティーを組んでいる2人とは自然と会話があう。この2人はリアルでも知り合いらしい。僕もそこにいたらなぁ、といつも思っている。

ふと、会話の流れでリアルでの日常の話になった。本当の僕を明かすわけにもいかない。だから、単に「クラスにむかつく奴らがいる」というだけでごまかすことにした。すると2人は冗談めかして、

『だったらそいつらもPKしちまえばよくね？』
『あ、お前それ俺も言おうとしたのにｗｗ』

……なるほど、そうか。そうだよな。あんなやつら、僕だったら簡単に殺せるもんな。なんだ、そんな簡単なことなんでもっと早く気がつかなかったんだろう。

僕は2人に「それ面白いなｗｗｗ」と返事をして、その後はろくでもない話をしばらくしてからログアウトした。

翌日の放課後、僕は家の物置から持ち出してきたロープを忍ばせて、いつも殴ってくる連中の親玉のあとを静かにつけていた。本当はゲームみたいにナイフが良かったんだけど、返り血を浴びるのが嫌だから絞殺にすることにした。

もし今日やって来なかったら許してやるつもりだったのに、今日はいつもよりも数倍酷かった。スパイクで蹴られた後頭部がまだじんじんする。もう同情の余地は無いね。一思いに殺してあげるよ。

既に日が落ちて辺りは暗く、息苦しいくらい静かだ。僕と獲物以外に人影は無い。それを確認すると、僕は気配を消してそいつのすぐ後ろまで駆け寄る。そして、ロープを一瞬でそいつの首にくぐらせた。

「――――っ！」

振り向こうとした瞬間、全体重をかける。そいつは空気を搾り出したような悲鳴をあげる。気にせず、さらにきつく締める。2分くらいで、そいつはぐったりと道路に倒れこんだ。なんだ、ゲームよりも簡単じゃないか。僕は念のため更に5分ほど締め付け、脈が無いのを確認してから揚々と家路に着いた。

パソコンを立ち上げると、僕はいつもと同じようにネットゲームにログインした。今日はいつもと違って気分がいい。こんなに晴れ晴れとした気分に慣れたのはいつ以来だろう。なんだかハイになっているのが自分でもよく分かる。いつもの2人を冒険に誘おうとメールボックスを開いたら、そのうちの1人からメールが届いていた。開いてみると、こう書かれていた。

『一大事だ。相方が、通り魔に襲われて殺された。なんでも、絞殺らしい。こっちが落ち着いたらまた連絡する。』

仮想空間に私は居た。
上岡紫苑という名前の一キャラクターとして。

リアルとバーチャルの垣根

ネットゲームとやらのキャラクターとして私は存在している。だからといって、私が毎日パソコンに向かってゲームをしているとか、そういうことではない。

私にそっくりのキャラクターがネットゲーム上に存在しているのだ。顔はもちろん、体のラインや性格にいたるまで再現されている。超リアルを売りにしたゲームだそうだ。

興味はほとんどなかった。ただ、求人誌を眺めていて見つけた仕事だった。最初にデータ入力のために会社に行けば、後は毎月お金が入ってくる。約束では、一月当たり、お小遣い程度の金額だったが、ゲームが稼動し続ける限り、何もしなくてもお金が振り込まれるのである。これほどおいしい仕事はないと、飛びついた。

面接会場には、多くの男女が文字通りすし詰め状態だった。それはそうだった。私のような考えの人間は世の中に多く居るだろうから。

面接は簡単なものだった。最初に訳のわからないマークテストがあった。意味のない形が何に見えるか選べだの、一番近いものを探せだの、テストといっても学力を調べるものではなかった。その後に筆記の教養テストがあり、運動能力試験や視力検査まで行われた。

その後、面接は一対一で行われた。質問を受けた、と言うよりは、雑談をしたような感じだった。いったいこの試験でこの人たちが何を見ているのかが気になった。

しかし、この面接はかなりの倍率のようだった。採用通知を受けた後の説明会に集まった人間は、明らかに数が少なかったからだ。意外なことに必ずしも美形が選ばれたわけではないようで、顔がよさそうな人から、普通のような人まで様々だった。

説明会の内容は、さしてたいしたものではなく、このゲームにデータを入れることに同意して欲しいだのという内容だった。

そんな一風かわった試験を受けてゲームのデータを取った。顔の写真や、全身の型までとるという念の入れようで、ここまでリアルにこだわるなんて、と驚いたものだった。

そして、現在、毎月お金が入ってきている。もちろん、ネット上では私の姿をした仮想の女性が歩き回っていることだろう。

そんな中、例の会社から連絡があった。ネットゲームをバージョンアップして、アダルト編にするのだそうだ。具体的には、ネット上でのリアル恋愛を実現するのだそうで。その中のキャラクターとして、「上岡紫苑」が必要なのだそうだ。

私は約束の金額が１０倍になることを聞いて、少しためらいながらもＯＫを出した。結局、私がどうこうなるわけではないから。

後日、もう一度会社にいって、契約の更新と、更なる詳細なデータを取られた。とはいっても、怪しいことはなく、雑談しただけだった。精神構造の検査だということだった。

この契約の直後に私には恋人ができた。顔は贔屓目に見てもあまり良くはないが、性格が私のタイプだった。やさしくて、面倒見がいい。

しかし、彼は、すぐに私のもとを去っていった。

例の会社が倒産したからだった。倒産したというよりも、幹部が検挙されたのだった。会社ぐるみでの犯罪行為。売春だった。

私の恋人だった人は、会社にお金を払い、私に近づいてきた。私は、催眠術がかかっており、彼をタイプの人間と判断するようになっていたのだった。

催眠術は、他の効果もあり、体を開きやすくしていたらしい。そんなわけで、仮想恋愛を実際に楽しめることが評判となって、例の会社は大もうけだったそうだ。

あれだけの壮大なテストは、催眠術が効きやすいかどうかを判定していたのだ。これだけのことをするのだから、本人に強く催眠術がかかるようにしなければならない。だからこそ、性格診断や、常識力などのデータだ必要だったというわけだ。面接では、軽い催眠術をかけられていたらしく、（全く覚えていないが）説明会で、集団催眠に完全にかかってしまっていたらしい。

私は運よく、被害を受けることは無かったが、相当の人数が被害を受けたようだった。ネットゲームの舞台を現実に移すという壮大な計画。

催眠術なんてかけなければ大成功だったのに。と思う。でも、催眠術がかかっていないと商売にならないんだろうね。

仮想空間の人間は現実に居るわけないんだから。

「現実と仮想の境界」

「かまいたちの夜」と言うノベルゲームがある。このゲームにはエンディングとして「主人公が同名のゲームを起動し、同じ足跡を辿り、又、ゲームを起動し…と続き、有る所から『ゲームの中の』主人公は電源を落として行き、自分もその流れにつられるように電源を落とす。そして後ろを見るとそこには電源を切ろうとする自分の姿が――」と、いうものがある。

自分の後ろにも電源を切ろうとする誰かがいるのではないか――

そんなものはゲームの中だけの事、と言う事は出来る。しかし、この世界が現実か、あるいは仮想か、そんな事を実際に判別出来る人間などいるのだろうか？

見て、触って、手ごたえも色も熱も在り、自分の思う通りに体の動くこの世界が仮想の物で在るわけが無い、そう言う反論も有るだろう。しかし、それらの感覚は脳への電気信号により感知されているものである。仮に、その信号がすべて誰かによって創造され、入力されていたら、その全ての在る「仮想の世界」に存在している事になる。何も知らず、自分が自分の意思で現実の世界に立っていると信じて。

もう少し一般的に知られている物を取り上げると、映画「マトリックス」はそういう世界を描いたものだった。何かと言うと派手なアクションシーンや増え続けるスミスさんを思い起こしてしまうが、そう言う舞台設定だった。自分が培養液の中で眠り続けている事を知らず、日々を送り続ける。

さて、貴方は今自分が確かに現実にいる、と言う確信を持てるだろうか？

今も後ろには、どこかから貴方を見て、操作している誰かが居るかもしれない。